2021年度U12ブロック育成センター
講習資料

JBA技術委員会　ユース育成部会

JBA
JAPAN BASKETBALL ASSOCIATION

2021年度U12ブロック育成センターweb実施内容

13：00-17：30（予定）
順序は変更になる場合あり

1．ユース育成部会より　20分
　①　コロナ禍における都道府県育成センター実施：ガイドライン第4版
　②　育成センターの位置づけと目的の再確認
　③　育成方針

2．指導者講習（鈴木良和）　90分
　①　シューティング技術
　②　フィニッシュスキル・ペイント内状況判断
　③　育成マインドの次の段階
　④　3×3の活用

3．スポーツパフォーマンス講習（佐藤晃一）　45分

4．マンツーマン講習（牧野広良）　30分

5．U12保護者アンケート報告（村上佳司）20分
　暴言暴力の根絶に向けて（豊田則成）　30分
　講習、ディスカッション含む
　映像配信予定

2021年度U12ブロック育成センターweb　注意事項

注意事項

・講義中はミュートにしておいてください。

・基本的に講習中は顔出しでお願いします。

・休憩を取りますので、それ以外は原則離れずご参加ください。

・質問やり取り等は講師が指定した時にお願いします。

・講習会映像の録画はご遠慮ください。（映像配信はJBAより行う予定です）

・写真等をSNS等に上げることはご遠慮ください。

2021年度都道府県育成センター実施について

①育成センター実施上におけるコロナ対策について

・安全を最優先、誹謗中傷を生まないための配慮
・感染対策責任者（担当者）の設置と育成センター実施ガイドライン作成をお願いします
・JBA活動事業実施ガイドライン第4版（9月9日発表）を参考
　→　感染対策の再徹底、PCR検査、ワクチン接種、陽性後の復帰

②育成方針と育成センターの位置づけ

・育成方針
・優秀な選手の発掘、育成、指導者教育
・U12世代の特徴を考慮した取り組み：普及的観点＝広く分けへだてなく伝えていく

③指導内容（鈴木良和氏，佐藤晃一氏講習）

・シューティング技術
・フィニッシュ・ペイント内状況判断
・スポーツパフォーマンス

④指導方法　他

・U12指導ガイドライン

⑤保護者教育

・U12保護者アンケート結果（村上佳司氏）：オフコート（日常）取り組み第一歩＝見える化
・暴言暴力根絶への取り組み（豊田則成氏）

育成センターの目的・位置づけ（育成センターガイドラインより抜粋）

育成センターの目的

公益財団法人日本バスケットボール協会（以下「JBA」）は世界に通用するバスケットボール環境構築のために「世界基準を日常に取り入れる」「世界を目指す環境を整備」「世界を視野に入れた指導を日常から行う」という強化・育成方針を示している。
これに基づき、将来日本代表となる優秀な素質を持つ選手や可能性の高い選手に**定期的に良い育成環境（練習環境・指導環境）を提供して個を大きく育てること**、合わせて指導者の研鑽の場として指導者を養成することを育成センター設置目的とする。

育成センターの位置づけ

JBAは本事業を部活動とは切り離した「社会教育事業」と位置づけている。
運動部活動ガイドライン（平成30年3月スポーツ庁より発表）において「競技団体は、競技の普及の観点から、運動部活動が適切に行われるために必要な協力を積極的に行うとともに、選手の育成・強化を運動部活動に委ねることなく、**アスリートを目指す優れた素質を有する生徒が、各地域において競技力向上に係わる専門的な指導が受けられるよう、実施体制の整備を推進する**必要」との指摘を鑑み、育成センターを計画する。
都道府県の実情を考慮しながらできうることから実施し、育成方針の具現化・育成課題解決のために育成センター事業を推進する。

育成センター実施における問題点

「個の育成」達成のために

①定期的に良い育成環境（練習環境・指導環境）を提供する
②各地域において競技力向上に係わる専門的な指導を提供する
⇒目的達成のために「練習会を月1回、年間10回を行う」ことを目指す
⇒良い育成環境のために、練習の他に交流試合（他県、他カテゴリー）があっても良い。

【問題点】

練習が少なく、試合ばかりを多く行っている例が報告されている
⇒目的および方法論が異なっている
U12：県（地区）育成センターをチームとして大会を企画

●望ましくない方法論（禁止事項）

・年間3回以上の交流試合の実施
・育成センターメンバーを用いた私的な練習会
・参加選手達のプレー機会に公平性がない方法
（練習機会、出場時間が大きく異なるなど）
・勝ち負けを前面に出す指導

改善されない場合

●望ましくない方法論での活動が改善されない場合

①　担当者への指導を行う

PBAユース育成委員会は、担当する指導者に対して目的と方法論を十分に理解させ、相違がある指導者に対して改善を求める。

②　活動に改善が見られない場合

1. コーチの任命権を持つPBAユース育成委員会は，任期途中であっても担当者する指導者を交代させる。
2. 交代する担当者がいなければ、事業を中止する。

※　活動に改善が見られないとJBAが判断した場合、該当事業に対してDファンド申請がなされていても、Dファンドの支払いを行わない。

育成センターのあるべき姿（目的および方法論）

●育成センターが目指すべきあるべき姿

目的　：「将来を見据えた個の育成」

方法論：

【育成環境】
・選手の発掘は、将来を見据えた選考を行う.
・早熟の選手は，適切なプレー環境を考慮し、飛び級を検討する。

【指導内容】
・「将来を見据えて」将来成長するための土台となる技術・戦術・トレーニングを指導する。
・戦術に特化することなく，基本技術・基本戦術を理解させ、徐々に要求を高めながら指導していく。
・系統的で選手の発達段階に応じた指導を実施する。
・具体的な指導内容は，JBA習熟度別指導内容を参考にする。
・コーディネーショントレーニングやスポーツパフォーマンス部会が提唱しているトレーニングを実施する。

【指導者として】
・育成センターの指導者は、暴言暴力のない指導はもちろんのこと、指導者として模範となる姿を表現することを心掛けて活動する。
・実施内容は、都道府県内の指導者に周知し、指導者養成にも寄与する。

育成方針

対象者		5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳
ハイパフォーマンス ハイレベル 競技志向	目的									個の育成 将来の土台を築く ポジションを決めない		高度な技術戦術習得準備 より競争的に ポジションを徐々に特化		より高度な技術戦術習得 高いレベルの競争 プロへの移行		プロレベルの技術戦術	
	パスウェイ 場＝日常									中学部活、クラブ、BユースU15（U18）			USA　NBA　Academy　等　海外 高校部活、クラブ、BユースU18			BLG、WJBL NCAA、海外大学、クラブ 国内大学	
	パスウェイ 経験＝年数回									全中 U15選手権 Bユース大会U15/U18 リーグ戦 都道府県DC ナショナルDC		全中 U15選手権 Bユース大会 U15/U18 リーグ戦 都道府県DC ナショナルDC U16代表候補	U16国体 ブロックリーグ U16代表候補 U18代表候補	高校新人 ブロックリーグ U17代表 U18代表	IH、WC トップリーグ U18代表 U19代表	リーグ インカレ U19代表 U20強化	リーグ インカレ U20強化 U22代表
対象者		5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳
中間層 ミドルレベル以下 競技志向	目的							楽しさと身体能力・ 個人（集団）技術の向上 心の成長・動き習熟・ 楽しさの追求		個の育成 将来の土台を築く ポジションを決めない		技術戦術習得準備 ポジションを徐々に特化		高度な技術戦術習得 競争の楽しさ		より高度な技術戦術習得	
	パスウェイ 場＝日常							（競技志向チームに近い） ミニバスチーム バスケスクール		中学部活、クラブ、BユースU15（U18）			高校部活、クラブ、BユースU18			BLG、WJBL NCAA、海外大学、クラブ 国内大学	
	パスウェイ 経験＝年数回							U12全国 U12ブロック 都道府県大会 リーグ戦 都道府県DC ブロックDC		全中ブロック U15選手権 Bユース大会U15 リーグ戦 都道府県DC ナショナルDC		全中ブロック U15選手権 Bユース大会 U15 リーグ戦 都道府県DC ナショナルDC	U16国体 ブロックリーグ U16代表候補 U18代表候補	高校新人 ブロックリーグ U17代表 U18代表	IH、WC トップリーグ U18代表 U19代表	リーグ インカレ U19代表 U20強化	リーグ インカレ U20強化 U22代表
対象者		5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳
エンジョイ層 レクリエーション志向	目的	遊びの感覚を大切に 身体を動かすことは 楽しい経験に		様々なスポーツとの出会い 楽しさと動き習得 心の成長・動き導入・ 楽しさの導入		様々な運動を行いながら 楽しさと身体能力・ 基本技術の向上 心の成長・動き習得・ 楽しさの習得		楽しさと身体能力・ 個人（集団）技術の向上 心の成長・動き習熟・ 楽しさの追求		個の育成 ポジションを決めない			戦術の学びとプレーする楽しさ			プレーする楽しさ 仲間との関わり コミュニティ	
	パスウェイ 場＝日常	幼稚園・保育園 幼児用スポーツ教室		小学校1/2年 スポーツ教室		小学校3/4年 ミニバスチーム バスケスクール		小学校5/6年 ミニバスチーム バスケスクール		中学部活、クラブ、スクール			高校部活、クラブ			国内大学 サークル 社会人クラブ	
	パスウェイ 経験＝年数回	イージーバスケット フェスティバル等		ミニバスによる フェスティバル等		各種ミニバス大会 フェスティバル等		U12全国 U12ブロック 都道府県大会 リーグ戦		全中予選 U15選手権 リーグ戦			インターハイ ウインターカップ リーグ戦			サークル大会 都道府県社会人リーグ	

年代別指導内容指針　ディフェンス

ディフェンス	U12	U13	U14	U15	U16	U17	U18
マンツーマン	●	●	●	●	●	●	●
ヘルプローテーション			●	●	●	●	●
複雑なヘルプローテーション					●	●	●
スイッチ					●	●	●
複雑なスイッチ							●
トラップ				●	●	●	●
ゾーンDF					●	●	●
フルコートゾーンDF					●	●	●

年代別指導内容指針　オフェンス

オフェンス	U12	U13	U14	U15	U16	U17	U18
1on1	●	●	●	●	●	●	●
オフボールスクリーン			●	●	●	●	●
オンボールスクリーン					●	●	●
トランジションアタック（カウンターアタック）	●	●	●	●	●	●	●
5アウト	●	●	●	●	●	●	●
4アウト1イン			●	●	●	●	●
3アウト2イン					●	●	●
セットプレーの導入					●	●	●

資料 2

2. 育成マインドについて

2020年度作成

JBA JAPAN BASKETBALL ASSOCIATION

Ver.1

■育成マインドの定義

「選手個々の成長過程を重視する考え方」

1．課題を与えて気づかせるコーチング

2．将来を見据えた勝敗を目指すプロセス、勝敗結果の捉え方

3．オーナーシップ（自分自身で責任を持つ・主体性）を育む

■育成マインドの必要性

ー　バスケットボールは互いの戦術を阻止し合うスポーツ　→　選手のオーナーシップを育む　ー

・世界トップレベルのバスケットボールは、常に互いにやりたいことを阻止しあう攻防の連続である。
・「戦術が阻止された後でも個で打開できる能力」「自身の判断で戦術を超えられる能力」がトップの選手に求められている。
・指導者の指示を従順に遂行するだけの選手は、最高の選手と捉えられていない。

ー　バスケットボールから人生を学ぶ　→　将来を見据えて　ー

・バスケットボールを通じて、選手は人生で役立つものを学べるように、指導者はサポートする必要がある。
・主体性を持ち、仲間と共に課題の解決に向かって取り組み、自己実現を目指す、バスケットボールを通じて学べることを指導者は選手に気づいてもらえるように働きかけたい。

ー　育成マインドの普及で「日本を元気にする」　ー

・これまでのコーチング概念を未来に向けて更に発展させ、育成年代の指導者全体がマインド（フィロソフィ・コーチング概念）を変化させていく必要がある。
・育成マインドは、バスケットボールによる人材育成をよりよいものとし、将来的に「バスケットボールで日本を元気にする」というJBAの理念の実現に繋がると考えている。

① 課題を与えて気づかせるコーチング

＜これまでのコーチングスタイル＞

■「できない子どもをできるようにしてあげる」＝　指導者が課題を解決する。

⇒　子どもは、解決するための根拠、プロセスがわからないまま課題の解決方法を学ぶ。
そのため、子どもたちは答えを待ち、課題を解決してもらうことに慣れていく。

⇒「課題を解決してもらうコーチングで育って選手」は、**指導者に依存しやすい。**

＜これからのコーチングスタイル＞

■「課題を見つけること」＝「できない子どもが気づくように大人はヒントを与える」

⇒子ども自身が課題に気づき解決することに対して、大人は助言、支援的指導をします。

⇒ティーチングポイントが大切であり、大人が示すか、子ども自身が気づくように助言をして上げることがよいでしょう。

■「課題の解決を図ること」＝「できるようになる」

⇒年代や習熟度に応じて子ども主体でできるように大人は助言や支援をするコーチングをしていきましょう。

■「課題を見つけること」と「課題の解決を図ること」を分けて捉えましょう。

⇒「課題を見つけること＝ティーチングポイントの認識」であり、全て大人が準備するのではなく子どもが発見したように感じられるように仕向ける（気づくように導く）こともコーチングテクニックです。

⇒「課題を与えて考えさせるコーチングで育ったプレーヤー」が将来的に質の高いプレーヤーになります。

⇒大人は「課題の与え方」が上手に、子どもは「課題の解決方法」を学ぶことになり、子どもに主体的に取り組む習慣が生まれてくると考えています。

育成マインド

勝利至上主義

OR

- 指導者が勝ちたい
- 強制・選手が依存
- 指導者が解決した勝利
- 選手の課題を指導者が解決してしまう

勝利主義
育成主義

AND

プレイヤーズセンタード
コーチズレスポンシビリティ

我々は子どもたちの未来に触れている

育成至上主義

OR

- 指導者の責任逃れ
- 放任
- スポーツの本質
- 成長の本質
- 指導者の存在意義

課題の捉え方 ← 境界線 → 勝利の捉え方

②　将来を見据えた勝敗を目指すプロセス、勝敗結果の捉え方

＜背景＞
・子どもが勝負に没頭することは自然である。
（遊びには勝ち負けがあり、そこに夢中になることは楽しさの要素である）

・大人の勝負のこだわりが、子どもたちの主体性を奪うことに繋がる。
（コーチの勝敗への関わり方は、選手の主体性の成長段階に応じる必要があるため）

・子ども自身が勝利を目指し、勝利を目指すプロセスを通じて競争の価値を学び、体感することが重要であり、指導者は勝利を目指す過程や結果の捉え方を伝えるため助言・支援的指導をする。

→　勝利至上：「大人が勝たせてあげる」といったコーチングは、世界の育成現場ではなくなっている。

→　育成至上：勝負を度外視したり、指導者の責任を放棄することは、コーチングに値しない。

→　グッドルーザー（敗者）の振る舞いを身につける。

育成マインド　勝利を目指す過程と勝敗の捉え方①

■選手の将来を見据えて指導する
ー 子どもを大きく育てるための勝敗の捉え方 ー

・「勝利」と「成長」の天秤は、常に両方を求める方法を模索する。

・「勝利」と「成長」の天秤がトレードオフ（どちらかを選択したら、他方を選択することができない）になった時には、育成年代の指導者は「勝利」以上に「成長」を追求する責任に比重を置くことを求めるべきである。

・　勝利に最も効果的な手段が、選手の将来にとって最適なものとは限らない。

・　選手の将来を見据えて、その時に学ばなければいけないものがある。

・　「学び」には、段階や順序がある。

・　選手の将来を犠牲にして、目先の勝利に必要なプレーを強要することは避けなければならない。

育成マインド　勝利を目指す過程と勝敗の捉え方②

■選手の将来を見据えて指導する

ー ゲームは、子どもを大きく成長させる機会 ー

・　その選手の将来のための「土台作り」をするのが育成年代の指導者の責任である。

・　試合は土台作りの手段の一つであり、試合の勝敗だけが全てではないことを知る。

・　選手にプレー機会を与える。
→　プレーの機会が、選手の成長にとって最も重要な機会である。

・　トライ（挑戦）＆エラー（失敗）を認める。
→　勝つことだけを優先するとエラー（失敗）を恐れ、トライ（挑戦）が減少する。

・　競争することが大切。
→　勝とうと「**全力**」で取り組むことで、選手はその過程において工夫し考察することを学ぶ。
→　「**全力**」で取り組んだ結果、試合に負けたとしてもそれは失敗ではない。

・　負けた時はグッドルーザーの意味を知る機会であり、指導者や保護者などの大人のサポートが重要となる。
→　相手を讃える。
→　自らの成長する機会と捉える。

③ オーナーシップを持つ自立した選手の育成

・指導者は、「どのように戦い」「どのようにして勝つか」といった課題を子ども（選手）から奪うべきではない。

→　勝敗についての課題を設定することに自らも関わることで、
選手は勝負に対する**オーナーシップ**（結果は、自分次第で変わるという考え方）を育むことができる。

→　勝敗についての課題を設定することに自らも関わることで、
指導者に依存することなく**「自立した選手の確立」**を目指すことが期待される。

育成マインド　指導者の指導行動（オーナーシップを育む）

■指導者の指導行動の在り方例

【U12】

・バスケットボールを始めた子どもたちには、指導を多くしてルール、技術を伝える。誤りは正して、正しい技術の習得を目指す。

・指導行動は大きいが、常に「バスケットボールの楽しさ」を強調する。その過程において、子どもたちは、自身で判断する楽しさ、達成した楽しさ、成功した楽しさ等を感じられるように配慮した指導を行う。

・この年代はスポーツに取り組む最初の習慣が作られる時期で、この時期に「指導者が勝たせてくれる」「指導者の指示通りにプレーすればいい」といった思考とならないように注意したい。

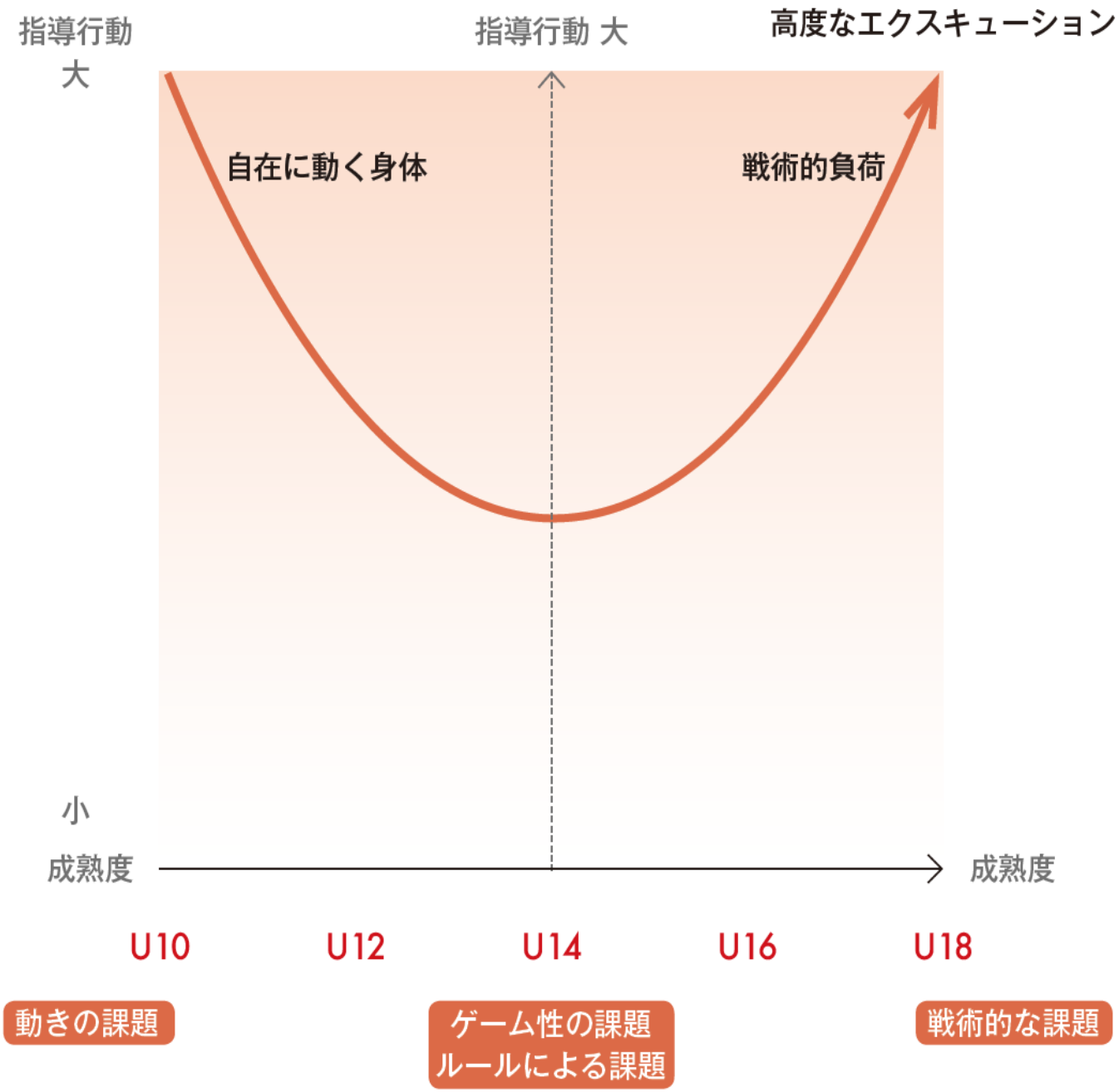
【U15】

・技術や基本プレーを学んだことで、自らの判断でプレーする習慣を養う年代である。

・指導行動は、U12世代より小さくなり、選手自身が未熟な状態ではあるが、ゲームを通じて試行錯誤を繰り返し、自らの判断でプレーする習慣を学ぶ。

【U18】

・応用的な戦術を指導するため、指導行動が大きくなる年代である。

・選手自らが判断していく習慣が失われないように考慮しながら、戦術的な要素が加わっていく年代である。

育成マインド　選手の成熟度と指導者の指導行動